HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	<研究ノート>サハ(ヤクーチャ)の草原と牛馬飼育
Author(s)	斎藤, 晨二
Citation	スラヴ研究, 42, 135-147
Issue Date	1995
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5238
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113392.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[研究ノート]

サハ（ヤクーチヤ）の草原と牛馬飼育

齋　藤　晨　二

はじめに

主として第四紀学あるいは古地理学の分野においてさまざまに議論されているテーマのひとつに、更新世末期すなわち最終氷河期の周氷河の地域がステップ景観を呈していたのか否かの問題がある。その存在を主張する説では、それが寒冷ステップ、ツンドラ・ステップ、マンモス・ステップ、北極プレーリーなど(1)とよばれている。

その説にしたがえば、当時、ユーラシアからアラスカの一部にかけて氷床（氷河）の存在しなかった地域一帯（南ヨーロッパ、東ヨーロッパ、中央アジア、モンゴリア、華北、東シベリア、それにアラスカ西部）は乾燥・寒冷な大陸性気候の下にあり、砂漠化していた地域もあったが、より広くは豊かな草原地帯であったとする。それが上記のようにステップないしはプレーリーと名づけられている所以である。たとえばガスリー論文の中にあるその分布図(2)によれば、日本列島も本州の中部以北がそうした草原地域の中に入っていたことになっている。また、トミルディアロが最終氷期（シベリアでいうサルタン Sartan 期）には北半球の広範な周氷河地域にレスの堆積をともなうこの種のステップ地帯が存在したと主張し、その時期のこの地域にマンモスを代表者とする豊かな動物相があったとしている(3)。

ただ、このような説には反対論があり、そうした広域にわたるステップ景観の植物相の存在を疑う説があって、マンモスなどの動物相はサルタン期に先立つ間氷期（Karginskiy 期）のものであるというのである(4)。

一方、現在の東シベリア一帯の自然環境をみると、広く永久凍土が存在し、これは一種の周氷河地域であるということができる。おおむね厚さ 200～400 m の凍土層があり、北極海沿岸の一部やヴィリュイ川流域山地では 1,500 m の厚さがある。もっとも、現在の東シベリアを氷期のそれと比較した場合、全体的に湿度と気温がより高くなって、地下に氷久凍土層をもちながら北極海沿岸部では湿地化したツンドラ植生、内陸部では森林植生が優位を占めている点が大きな相違点であるとされる。しかし、ヤクーツクの位置するレナ川中流域やヴェルホヤンスクを中心とするヤナ川上流、オイミャコンを中心とするインジギルカ川上流の各盆地などは激しい大陸性気候を呈しており、森林のほかに草原、砂漠状地域がみられ、強いアルカリ性土壌に乾燥地特有の植生が分布する個所もある。この一帯は、また、北半球の寒極といいならわされているが、夏期の高温にも注目すべきである。こうした激しい大陸性の自然環境の特徴は、氷期の周氷河地域のそれに類似すると考えられる。この点に注目すると、東シベリア内陸から北東のチュコト半島内陸部にかけて、カラマツ

を主とする森林の間に点在する草地の島が、かつてのマンモス・ステップの名残であるとする見解が生まれてくるのである(5)。

サハ（ヤクート）人の営む牛馬飼育はこのような自然条件の下に成立しており、その牧畜はいかなる特徴があるのか、モンゴリア、中央アジアのそれとどのような異同があるのか、また、起源的な関連の有無はどうかなどのテーマが興味をひく。本稿ではサハ共和国(ヤクーチア)内陸部に分布する草原の自然環境とそこで営まれている農牧業、とくに牛馬の飼育について、主として文献資料によりながら若干の筆者の調査結果をまじえて考察を試みることにする。

気　候

現在のレナ川中流域（左岸支流ヴィリュイ川、右岸支流アルダン川流域に囲まれた中央ヤクーチア）の気候をみると、年間降水量200 mm前後、年平均気温－10°C、最高気温＋36°C、最低気温－64°Cを示し、気温の年較差は100°Cに達する場合もある。ヴェルホヤンスク盆地になると年間降水量は155 mm、年平均気温－15°C、最高気温37°C、最低気温－68°Cとさらに較差は大きくなる。北緯60°以北に位置するこの地域では、夏には日照時間が長く、内陸の盆地地形のため気温の上昇が著しく、無霜期間が90～100日に達する。1日の平均気温が20°C以上の日数が10～20日あり、同じく10°Cの期間の積算温度は1,000～2,000°Cある。これらの平均気温20°Cの日数、積算温度の数値はモスクワ付近を含むヨーロッパ・ロシアの過半を占める地域とほぼ同様である。ただし、この間の降水量はモスクワ付近にくらべてヤクーツク付近では3分の1以下である。他方、冬期1～2月には1,026～1,027 mbの強い高気圧下にあって平均風速0.7～1.5 mという無風状態に近く、気温は－60～－70°Cにもなることがめずらしくない。降水量も当然きわめて少なく1～2月の合計雨量で10 mm強、3月の積雪量でみるとヤクーツクが28 cm、ヴェルホヤンスクでは24 cmである。この地方の冬の大気中に含まれる水分を水蒸気張力でみると、ヤクーツクおよびヴェルホヤンスクを含む円内が0.1 mm以下となっており、ユーラシア大陸の中で最も低い数値を示すことで目立っている(6)。要するに、この東シベリア内陸部は寒極とみるよりは大陸性気候の極と解する方が適当である。

地形と植生

こうした気候下の地域に見られる特徴的な地形として、砂丘をともなう砂漠とアラース(alaas)と呼ばれる陥没地があげられる。

小規模な河畔砂丘はレナ川の河岸にヤクーツク付近でも見ることができ、カラマツ・タイガの間に数ヘクタール規模の突然まったく植生を欠く砂丘ができている個所がある。元来、エウェンキあるいはヤクートの言葉でtukulaanとよばれていたようであるが、トゥクラン（tukulan）としてこの地方の地形学用語で示されるものである(7)。大規模な半月形砂丘の連続するこの種の地形として知られているのは、レナ川左岸支流ヴィリュイ川のさらにその左岸支流一帯にあるトゥクランである。この砂丘群は、しかし、かなり植生におお

われており、丘と丘の間の低地は湿地化している。その衛星写真と詳しい図解を掲載したネヴャジスキー、ビジエフの報告[8]によれば、東のヴェルホヤンスキー山脈方面からの南東風によって河床の砂をその供給源に形成されたとしている。最終氷河期に水量が減少した河床あるいは陸化した大陸棚の砂を供給源として、北東シベリア一帯にレスの堆積が起こったとする説では、現在も認められるトゥクランがその例証としてひかれているように、周氷河の乾燥した気候が成因の一つにあげられる[9]。

この中央ヤクーチアでより顕著な地形現象は、地下の凍土の融解によって生ずる陥没地形のアラースである。その成因と形態については別の機会に触れたことがあるのでここでは省略するが[10]、タイガの中に点在する大小のアラースの草原が河谷の氾濫原の草地とともに、最初にヤクート人の祖先たちの生活空間となった場所であり、牛馬飼育のための牧地・採草地でもあった。草の種類ではプレーリー性の丈の高い長草、ステップ性の短草、

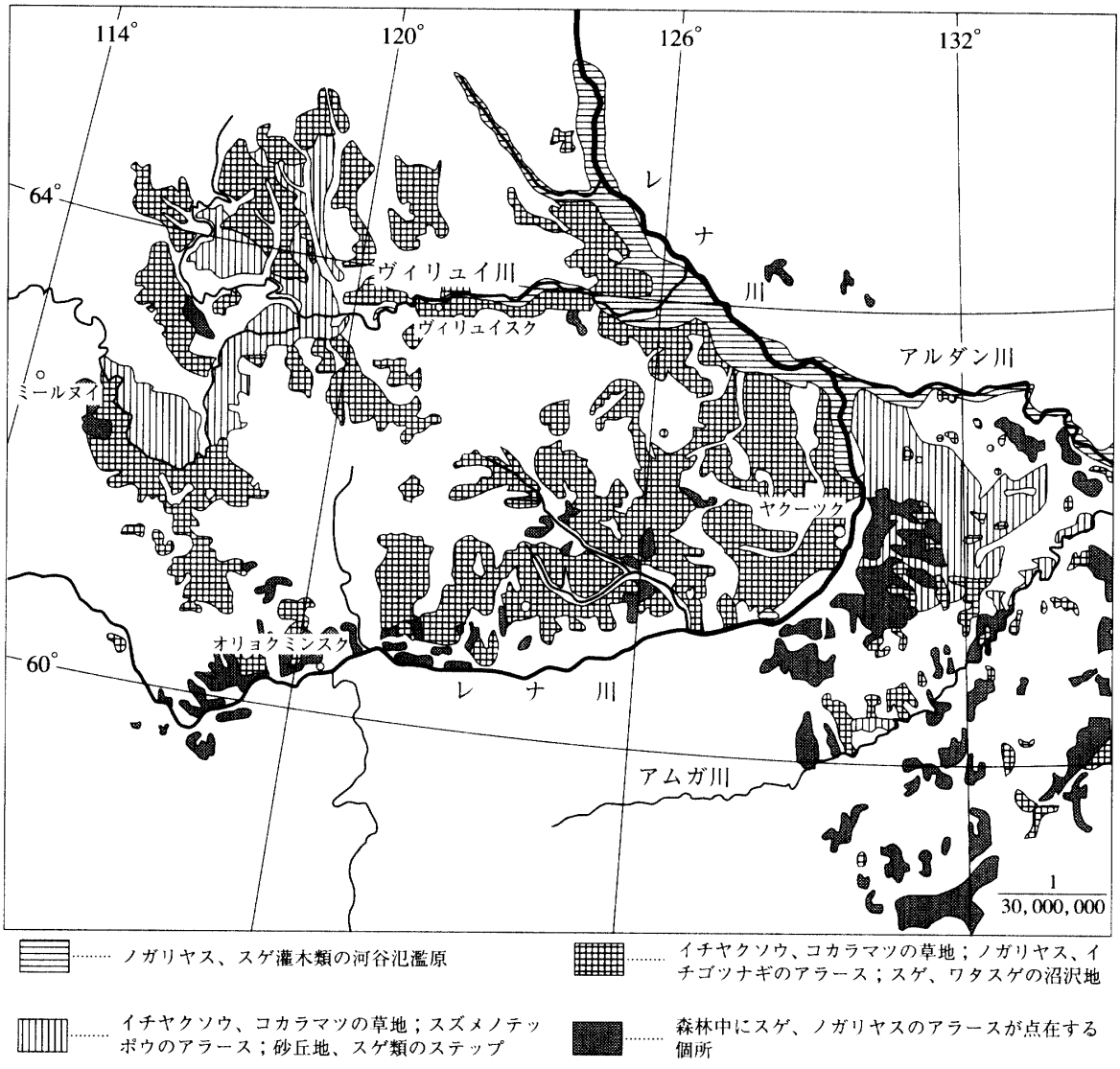

図1　中央ヤクーチアにおけるタイガの中の草地
（*Атлас*：40により作成）

塩地性の草がある。長草には禾本科、豆科の草類、スゲ類など種類が多く、短草ではハネガヤ、ウシノケグサ、ヨモギ、イチゴツナギなどがある。また、河川の氾濫原の草地にはヤナギ、サンザシ、ハンノキなどのブッシュが繁茂している。現在のヤクーツク市を中心とするレナ川中流域の氾濫原一帯は、トイマダ・ステップ(11)とよばれる豊かな草類と灌木類の茂る地域であって、ここがサハ人の本拠地ともいえるところである。また、レナ川と支流のアムガ川の間の地域（レノ・アムガ分水域）も、チュラプチン・森林ステップと呼ばれる多様な草類の植生が豊かな地方である。なお、中央ヤクーチアは年間の降水量と蒸発量がほぼ等しいか、蒸発量が降水量をうわまわる地域であるために、土壌分布では黒土ないしアルカリ性土壌が見られ、アラースにも塩湖をともなうものがある。そのためとくに乾燥度の強い場所とか塩湖周辺には、ヨモギ科のアルティミシアなどの乾燥地あるいは塩地性植物がかなり目につき、この面でこの地域が内陸アジア的であることも見逃せない。

今日見られるこれらの草原は、自然の草地であっても人為の加わった結果であるところが相当多いことも否定できない。もとは森林であった地域が火災あるいは伐採によってアラース化が起こり、それが草原化したという事例である。牧地・農耕地を拡大するために歴史的にこれが積極的に実施されたようであるが、これまでのところ筆者の聞き取りではそれについての明確な答えはあまり得られていない。もっとも、レナ、ヴィリュイ、アルダンなどの河谷の森林率は60～80％であるが、農牧地として開発されたところではこの数値が大幅に減少し、ヤクーツク地区では河谷の森林率５％で、プレーリー性の草地が45％を占めているという記述はかなり具体的ではある(12)。しかし、これもトイマダ・ステップとよばれていた地域を除外した数値なのか否かは不明である。ここだけの種類であるハネガヤなどは、人為が加わったためスゲに駆逐される危機にあり、保護の必要があるといった現象もある。

馬飼育民サハとレナ川中流域

サハ（ヤクート）人の民族形成史については未解明な問題が、なお、多く残されているようであるが、概要は以下のようである。人種的にはかれらはモンゴロイドに属するが、そのうちの東シベリアの先住民にみられるバイカル型の特徴をもちながらも、より強く内陸アジア型の特徴をもっているとされる。このことは考古学的ないし民族誌的分野の諸特徴とも一致している。すなわち、現在のレナ川中流域のサハ人には、南から移住してきたチュルク系民族の文化とこの地域の先住民の文化の両要素があり、言語的にはチュルク系であるということである。従来、サハについては、その言語的特徴やかつてかれらが沿バイカル地方に居住していたことを物語る口承伝説、それにかれらは馬飼育民であって、周辺のトナカイ飼育と狩猟・漁撈を営む民族とは異なることなどから、サハの南からの民族移動が強調された。しかし、無人のタイガ地帯を2,500 kmも通過して、沿バイカル地方からレナ川中流域のトイマダ・ステップないしレナ・アムガの両川間の草原まで、牛馬の群れをともなって一気に移動してきたとは考えられないとして、この説は支持されなくなった。現在有力視されている説では、西部沿バイカルに９～10世紀頃居住していた西ブリヤートにかなり近い馬飼育文化をもった民族――西ブリヤートの形成にもあずかったチュ

ルク系のクルイカンがその中心であったとする――がかなりの長期にわたって漸次レナ川の谷沿いに北上し、その過程でタイガの狩猟民と融合し、言語的にはチュルク的な特徴をもつ新たな民族が形成されていったと考えられている[13]。その際、牧畜に好適な条件にめぐまれたレナ・アムガ両川間の地において、南からの到来者は現地の狩猟・漁撈民の文化要素を吸収しながらも、牧畜文化によって次第に優位を占めていったのである。

もっとも、このようなレナ川の河谷に沿っての民族移動説に対しては地形・植生などの観点から別の推論も成り立つ。

それは、バイカル湖西部から北へ牧畜民が移動する場合、深い谷を刻むレナ川とカラマツタイガのかなり密生した森林を通過しながら、牧畜文化を維持しつづけたとするのは不自然であり、むしろ、バイカル湖西部から比較的広く開けた高原状の地形を呈し、灌木林と草地の混じるヴィリュイ川上流部をへて、ヴィリュイ川の広い谷に沿ってレナ川中流域にまで及ぶ方がはるかに自然なプロセスであるとする見方である。ヴィリュイ川流域がサハ文化の本拠地であると主張する人々には理解しやすい説であるが、このバイカル西部～ヴィリュイ説を裏付ける考古学的ないし人類学的な調査は今後の課題である。

ところで、かれらの初期の牧畜文化がどのようなものであったのかは、必ずしも明らかではなく、確かな記録として残るのは1620年代のロシア人到来後である。要約すれば、森林中のアラース、あるいは河川氾濫原の草地において、夏と冬の牧地を移動しつつ牧畜を営んだ。ロシア人到来以前から、すでに草刈りによる冬の飼料の準備を行っていた。馬の保有がステイタス・シンボルではあったが、経済的有用性から次第に牛の飼育数が増加した。貧しい階層の者は、漁撈に生活の重点を置くとか、有力者のもとで牧夫として働いた。大量のヨーグルト、バターを作り冬の食料にした。その他に無視できない事として、ロシア人のもたらした農耕がサハ人にも取り入れられて発展しはじめたこと、などである。ヤクートについては、現地調査にもとづいて、はじめて体系的に記述した重要な文献として、ヨヘルソンの著書があり[14]、現在でもこれは基本文献のひとつである。筆者はこれを含む数点の文献を紹介しつつこれらのテーマについてすでに論じたことがあるので[15]、さらに重複して論ずるのは避け、このような基礎の上に展開されたソ連時代のサハ（ヤクート）における主として草地と牧畜の問題を取り上げてみよう。ヨヘルソンらの時代より数十年を経て、ようやく可能性の出てきた我われ外国人による現地調査を前に、一応の調査すべき課題を定めるためのひとつの作業として、これは必要であろうと考える。

農牧地

この場合、元来の草原のほかに人為的に開発された耕地、放牧地、採草地を含むものとする。N. T. ポポフの挙げている数値を追って見て行こう[16]。

自然条件の上でもっとも恵まれている中央ヤクーチアでは、農牧地は大河川の流域、タイガの中の河谷やアラースである。タイガの中に相互にかなりの距離を置いて散在するアラースは小さなものでは0.5 ha、大きなものでは2,000 haほどの面積がある。

伝統的には、森に囲まれたアラースの草地が農牧地として限られるのが普通であったが、コルホーズ化が行われた頃、レナ・アムガ両川間地区ではコルホーズどうしの境界線がア

ラースとアラースの間の森林部分を分断して引かれ、これに対してヴィリュイ川地区では、アラースの範囲と最小限度の森林部分を加えたものがコルホーズ用地とされた。後にコルホーズがソフホーズに移行した際に、これらの森林部分は樹木を根こそぎにして農牧地化され、その他の森林は国有林となったという。これが牛馬飼育・農業型（後述）の地域の土地利用だという。レナ・アムガ両川間地区とヴィリュイ川地区の相違の理由は明らかではないが、ひとつ考えられるのは地層の条件の違いがあろう。レナ川中流域には数段の河岸段丘が発達していて、低位の段丘ないしは河川氾濫原では地層中に氷の含有量が少なく、森林の除去とか地面の掘返しを行って農牧地化するのは容易であるが、上位の段丘の地層には大量の地下氷が含まれているために、森林をなくすと凍土の融解による大規模な湖沼の発生を引き起こす恐れがある。実際にレナ・アムガ両川間へ行ってみると、確かに森林破壊の後にアラース化が起こって地面が陥没し、湖沼ができたと思われる個所もあるが、彼方までなだらかに起伏する地形のままに広大な農牧地が展開しており、部分的に森林がまだ残っているに過ぎないような地域が一般的であるように思われる。ヴィリュイ川地区はこれとは対照的に、森林火災によるアラースの発生が問題視されている例さえある。

1980年までの段階でみると自治共和国の農牧地は全面積の3.6%で、そのうちの58.2%がソフホーズになっている。中央および西部ヤクーチアのタイガ、アラース地帯で温度、水にめぐまれた所には15～25 haの広さの農牧地があるが、より小規模な農牧地というのは冷害、干害に遭いやすいなど自然条件の悪い所である。新たに農牧地化されるのは森林伐採による以外に不良採草地、休耕地ないし放棄されていた元の農地などであるが、これらの農牧不適地が生ずる原因には温帯の乾燥地と共通した耕地の塩地化現象が関わっており、そのために休耕が必要になるようである。1954～1985年の間に6万5,900 haの休耕地が農牧地化されたが、逆にこの間に休耕地となった面積は12万3,500 haであるという。自治共和国内の塩地化した土地は37万6,300 haという数字がある。農牧地化による土地の荒廃として、さらに土壌浸食によるもの1万3,300 ha、湿地化によるもの23万8,500 ha等があげられる。

土地改良事業の失敗例として、さらにいくつかがある。灌木を伐採したり、小丘を削るなどして1965年から23万haのプレーリーの改良事業を行ったが、その41%が沼沢地化により良好な草地としては再生しないとか、林地化するなどで使用されずに終わってしまったとか、1971～1978年には採草地、放牧地の改良事業を8万6,000 haについて実施したが、さしたる効果がなかったなどである。これらの例には地下氷の融解による土地荒廃が含まれることはもちろんである。

要するに気候条件も加えて、現在のサハ共和国内で農牧用適地（ヨーロッパ・ロシアにあてはまるような基準からみて）といえるのは中央ヤクーチアのみであり、そのうち耕地として適格なのは10%であるというような厳しい評価が下されている。ただ、採草地として評価すれば、あるいは、天然牧草による畜産業（牛馬飼育）地としての観点からすれば、ここは高い評価の得られる地域であることは間違いないであろう。

牛馬飼育の現状

旧ヤクート自治共和国における農牧業総生産額の中で牧畜業の占める割合が86%に達し、その中心となっているのが牛肉・牛乳生産のための牛飼育と肉生産のための馬飼育である[17]。

まず、もっとも重要な地位を占めている牛飼育についてである。肉生産額の60%が牛肉であり、1986年1月現在で39万7,000頭が飼育されているが、自治共和国内の都市、鉱工業生産地での乳製品、肉の需要を満たせない状態である。その飼料は基本的には天然牧草地によっており、飼料の80～85%が干草である。しかし、天然牧草地の生産性は低く、1985年の統計では1 ha当たり6.4ツェントネル（1ツェントネル＝100 kg）という。それを補う濃厚飼料も不足しているために飼育頭数を増せないとか、牛乳、肉の品質の低さなどが問題点として指摘され、その対策として飼料基地の創設、牧草栽培地の改良、畜舎の新・改築、飼育作業の機械化・電化、技術者の養成などが提唱されている。これらは近代的な畜産業の推進をはかることであり、従来の牧畜の方法に対してさまざまな改善策が考えられているようである。

牛の品種の問題もある。その中に厳しい環境や飼料基地の特性に合わせて自然・気候帯に応じた品種を作り出そうという考え方がある。現在おもに飼育されている品種は乳・肉用のシンメンタール種、乳用のホルモゴール種、それに少数のヤクート牛である。このうちシンメンタール種は分布域が最も広く、都市、人口集中地区の周辺でとくに乳用としての改良が進められている。ホルモゴール種は、もともとヨーロッパ・ロシアの北極海に近いアルハンゲリスク州の北ドビナ川下流域で品種改良されてきた牛であり、都市近郊の他に極北地域の苛酷な環境における飼育にも適している。

より環境に適応し、生産性も高い品種をつくろうという努力がなされ、ヤクート牛のもつ多脂肪乳、極寒・粗食への適応という性質にシンメンタール、ホルモゴール両種の長所も備えた牛をつくりだそうという試みがある。それをみるとこの地域で行われている牛飼育の基本的な方向は純肉用の牛ではなく、あくまでも乳用の牛が中心となっていることである。肉用に当てられるのは、乳牛としては「低生産性牛」とされた子牛を肥育するのが一般的である。肥育のための管理方法等は経済性も考慮して、たとえば生後16～18カ月のものを80～90日で400～450 kgにするなどの目安がたてられ、とくに夏に放牧地で十分草を食べさせた後、冬には運動をさせないで飼料を与える方法が最も広く行われているという。ただ、冬季に飼料不足となるようなおくれた養牛場の場合、6月なかばから放牧地に出して十分草を食べさせ、9～10月には囲いの中で肥育し350 kg以上にして売り渡すという方法をとっている。

つぎは馬飼育の場合であるが、これは「馬群飼育」といわれているもので、肉、クミス(kymys、つまり馬乳酒)、皮革、毛などをとるために飼育するものである。古い伝統をもつことは先述のとおりであるが、現在の畜産業のうちでも将来性のあるもののひとつとされている。ここの馬飼育の特徴は、冬のごく短期間、添加飼料を与えるものの、雪中放牧もともなう周年放牧である。この方法に最も適しているのは在来のヤクート馬であり、当

地の厳しい気候条件の下では他品種との交配種はよい結果を得ていないという。

ヤクート馬は粗食に耐え、雪下からひづめで草を掘り出して食べることができるなどのために収益性の高い畜産業とされ、肉の原価が牛の63%、豚の40%と計算されている。商品生産の割合では牛肉が第1位、ついで多いのが馬肉である。原価の上ではトナカイ肉が馬肉より若干安いとされているが供給量では及ばない。

ヤクート馬は伝統的に編み出されてきた馬群飼育の方法、独特の気候・自然条件への適応、並外れた耐久力、などによってサハ全域で飼育に適しているが、やはり、中央ヤクーチアに80%が集中している。基本的に周年の自由放牧によっているために、気候とか牧草の条件のよい地域での飼育頭数が必然的に多くなるのである。(もっとも中央ヤクーチアで飼育されている馬は純粋のヤクート馬ではなく、ヨーロッパから移入された種類が大部分であり、そうした品種についても在来種と同様の冬の飼育方法を採っているとは考えられないが、この点については今後調査したい。)同じヤクート馬でも共和国内の環境の影響によって多少地域的な変種があることから、この点に着目して異種間の交配によってより優れた品種をつくりだす可能性があるとして、ソフホーズの種畜場ではその試みがなされている。

ヤクート馬の肉質はきわめて良いとされる。馬肉は元来サハ人に最も珍重される肉であるから、その肉質についての関心は非常に強い。肉の蛋白質、脂肪の割合などがこまかく比較され、生後6カ月の子馬の肉がもっともよいということである。

クミス（馬乳酒）は栄養価が高いだけでなく薬効があるとも考えられ、かつては非常によく飲まれるものであった。数字の上ではクミス用に雌馬の10%分の搾乳（120～130 kg）を行っても支障がないといわれながらも近年その醸造は減少して、ヤクーツクなどでは口にできなくなっている。食習慣の変化か、それ以外の要因があるのかは不明である。

この他、皮革、毛、毛皮も重要である。皮革からは民族靴、毛からはじゅうたん類、毛皮からは帽子、襟などがつくられ、いずれもサハ人の伝統工芸にもとづくもので、ロシア人にも愛用されるようになっている。筆者の乗せてもらった車に、なめしたヤクート馬の毛皮がシートにかぶせてあった例もある。

牛馬飼育の地域的相違[18]

サハ人の人口は328,018人（1979年国勢調査）でそのうちサハ共和国内に313,917人が居住しており、共和国総人口851,840人の37%である[19]。共和国総人口の68%が都市または都市的集落に居住しているが、その71%はロシア人でサハ人は14%弱である。農村部の人口比率では、ロシア人の17%弱に対してサハ人は73%余りを占め、これにエウェン、エウェンキ、チュクチ、ユカギールその他の少数民族を加えると、サハ人など農村部の非ロシア系人口の割合は約78%となる。（これらの少数民族はおもにトナカイ飼育・狩猟・漁撈を営んでおり、本稿ではあまり触れる余裕がない。）

鉱工業の発展により都市人口が増加したこと、それにともなう、とくに都市近郊における野菜・ジャガイモ栽培や酪農の発達が、伝統的な農村の生活・文化に大きな変化を引き起こし、農畜産物の大消費地との関係、すなわち、各農牧業地域における地理学でいうと

ころの地域性の相違によって、サハ人を中心とする農牧業地域には、いくつかのタイプが生まれることになった。これにはまた、政策的な集落の統合、ソフホーズ（国営農場）化などの結果も関連している。1950年代からの大集団化がシベリアの少数民族社会に破滅的な影響を与えたことが指摘されている。この問題は西シベリアにおいてとくに深刻であるとされる。東シベリアについては、極北地域の特殊性のため、あるいは、組織化が若いために、いまだソフホーズ内が運営できずにいるというような指摘があるところをみると、少数民族の伝統的な生業形態が色濃く残っていることが推定できる。このテーマは今後の課題である。

ところで、サハ人の伝統的生業の中心であった牛馬の牧畜がこうした状況のなかでどのようになっているかをみよう。

大規模な集団化が実施されたあとの時期を選び、東シベリアにおける牛および馬の飼育状態を示す分布図を作成してみた。ソ連全域をみると牛馬飼育はヨーロッパ、中央アジア、カザフスタンに広く行われているが、ヨーロッパ・ロシアから東へつづくシベリア鉄道沿いの農業地域にも分布している。この図の南部がそれである。本稿のテーマに関連して興味があるのは、北緯60°線以北に上記の分布域から孤立した形で牛馬飼育域が明瞭に現われていることである。ここがレナ川中流域の中央ヤクーチアとヴィリュイ川流域である。牛と馬とでは牛の方がはるかに頭数が多いのは、ソ連時代以前から指摘されているのと同じ傾向であり、両者の分布域はほとんど一致しているのをみても、いずれもサハ人を主体とする飼育者によることをうかがわせる。この飼育形態には数種のヴァリエーションを区分することができる。

(1) 牛馬牧畜型 ── 中央ヤクーチア・ヴィリュイ川流域地方で都市、幹線交通路などから離れた地域にみられる。牛馬肉の生産をおもな目的としており、より集約的な農業、酪農には適さない地域である。利用可能な採草地と放牧地の分布状態によって住民の居住形態も決まってくるが、この地域に旧ヤクート自治共和国の農村人口の30%が居住する。このタイプには、伝統的なサハ人の牧畜業を引き継ぐものが残っているのではないかと推定される。

(2) 牛飼育・農業型 ── 中央ヤクーチア（レナ・アムガ、アルダン各川流域）および西部ヤクーチア。肉・牛乳生産と農業（飼料用穀物栽培、牧草栽培、都市向けの野菜・ジャガイモ栽培）が行われている。住民居住区は主としてソフホーズの規模の大きな各種施設を備えた中心地区であるが、それ以外に放牧地、耕地にある季節的利用の小規模集落が多数あり、周年居住の集落も散見される。

このタイプはさらに2種に分類でき、そのひとつは牛・穀物型、いまひとつは牛・野菜・ジャガイモ型である。前者の特徴は周年ないし季節的な小型牛乳加工センターを多数もつことであり、後者はより集約的で大規模な居住団地をもっている。

両者を合わせたタイプが共和国内では最も多い農村人口をもち、全体の40%を占める。

(3) トナカイ・牛馬飼育型 ── 共和国北部の山地タイガ地方。北極海沿岸のツンドラ地方と異なり、移動生活者が少なく、集落は固定的である。この定住地の付近で牛馬飼育が行われ、農業も可能である。トナカイ飼育と牛馬飼育の組み合わせが、この地域の自然条件と現地の労働力を生かしたソフホーズ経営であるといわれる。しかし、人口規模としては

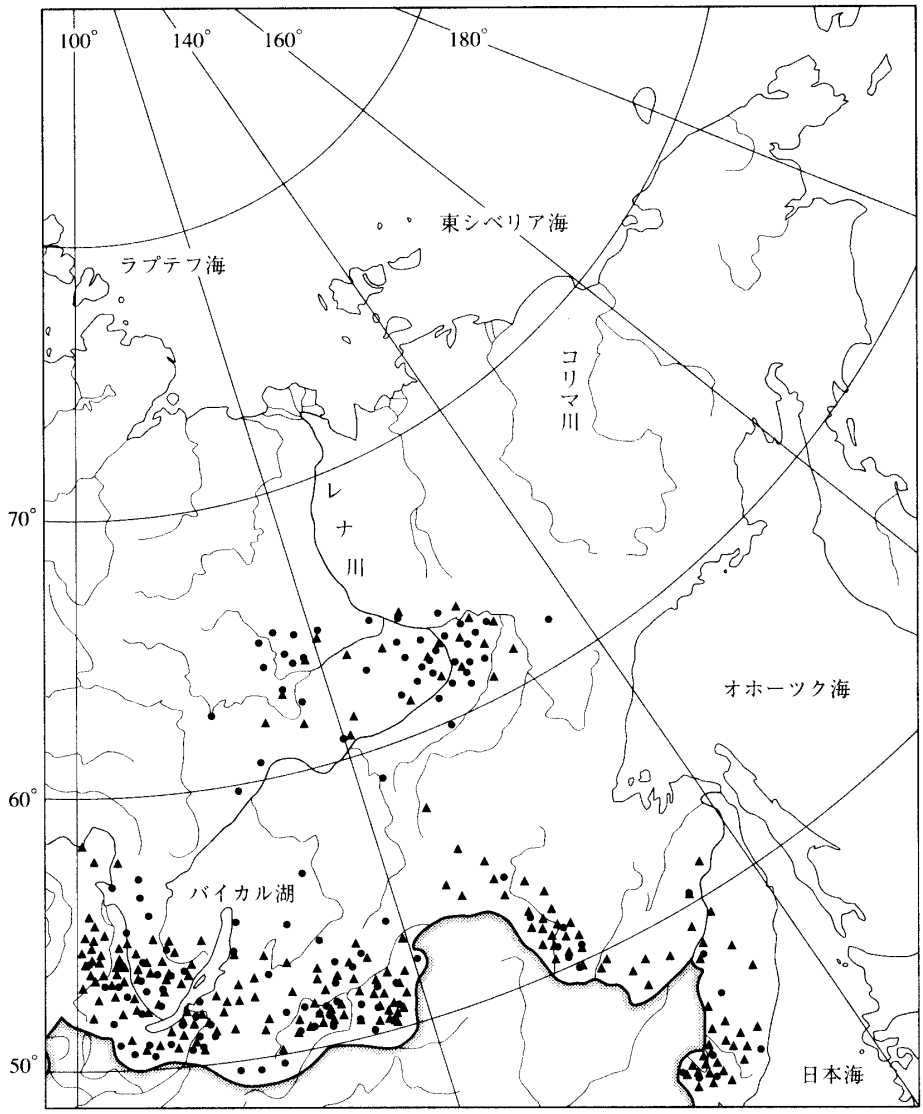

図2　東シベリアにおける牛馬の分布　（*Атлас СССР* 1969：122－123により作製）

馬1点3,000頭　牛1点15,000頭

小さく、農村人口の３％余りである。

(4)　牛飼育・狩猟型 ── コリマ～インジギルカ両川下流域地方および共和国北東部山地タイガ地方。牛飼育と毛皮獣狩猟がその特徴であるが、トナカイ飼育も若干行っている者が多いとはいえ、そのために移動生活をする者は少数である。上記のタイプ同様、牛馬を飼育できるのは定住生活が中心であるためである。

このタイプも二つに区分でき、ひとつは湖沼･低地型（ツンドラ地帯）、いまひとつは山地タイガ型である。前者では牧用地が特定場所に集中していて広い。ソフホーズの中心地区の人口が多い。交通手段として小型機、ヘリコプターがよく利用されている。これと対照的なのが後者で、牧用地は狭い河谷で湿地の多いところなどに分散している。ソフホー

ズの中心地区からそれぞれの牧地までは10～200 km離れている。地形が複雑で、住民は各牧用地の近くに小グループで居住しているために、交通手段として空路は利用しがたく、相互の連絡が不定期的になりがちである。飼料はおもに手作業による自給である。この牛飼育・狩猟型を営むのは共和国の農村人口の約6％である。

おわりに

牛馬飼育が認められるのは以上の4つのタイプであるが、分布図に該当するのはこのうちの(1)と(2)である。ただ、飼育されている家畜に本来の意味の在来種を発見するのは困難であり、純粋のヤクート馬と呼ばれる強い耐寒性をもつものなどは、ヴェルホヤンスク地区、ヴィリュイ川支流のマルハ川流域などに少数が保護されているだけである。近代的畜産学の導入以前と以後とではさまざまな点で相違が大きく、本稿のように伝統的生業という面から考察するには、少なくとも1、2世代前にさかのぼってみる方法をとる必要があるだろう。

(3)、(4)は歴史的にはより新しく飼育が始められたもので、サハ人が山地、ツンドラの地域へ進出し、先住民の生業であるトナカイ飼育・狩猟を借用しつつも牛馬飼育が可能なかぎりは、この民族の伝統的な生業もつづけてきた結果であろう。サハ共和国内には、上記の(1)～(4)以外にレナ～コリマ両川下流域で狩猟・漁撈を営むソフホーズと北極海沿岸のツンドラおよび共和国南部のタイガ地帯でトナカイ飼育を営むソフホーズが区分されている。これらはサハ人以外の少数民族の経営が主体であるが、牛馬飼育がほとんど不可能な地域とみてよいであろう。サハ人でも完全にトナカイ飼育に移行した者については、I. S. グルヴィチ[20]の詳しい研究があり、それによれば、ツンドラ地域でいったんは牛馬飼育を持ち込みながらそれを放棄してしまい、習俗には牛馬に関連した儀礼などが残っている事例等が報告されている。もっとも、北極海沿岸でも牛が飼われているという報告は、すでに1882年にミュラーが行っており[21]、ツンドラ地帯における上記(4)は、そのような飼育の伝統を引き継ぐものであろう。筆者は1991年の夏にレナ川河口デルタの都市チクシの近郊で、数十頭のホルモゴール種と思われる乳牛の放牧を見ている。

ちなみに、ツンドラにおける大規模な牛飼育の可能性に関連してはトミルディアロらが、凍土現象にともなう地形の一種であるポリゴンによってできる沼沢を干拓して草原化する方法で、ツンドラ一帯に広大な牧草地を造成することを提唱している。現にその実験的な試みがチュコト半島のアナジリ市近郊で行われているのを1991年8月に筆者も現地で見学した。そこでは沼沢地の表面の泥炭層をブルドーザーで剝がして土壌改良を加え、コンクリートの排水路を設けて牧草地を造成する方法を採っている。1m近い草丈の牧草が育っている畑があり、マンモス・ステップあるいは北極プレーリーの復活と豪語されているが、これによってツンドラ地帯に牧畜経営ないし酪農業が経済的に成り立つかどうかは、人口希薄な僻地であることなど、自然条件とは別に、社会的、経済的にその他の問題が大きいと思われる。

— 注 —

1 холодная степь, тундростепь, mammoth steppe, арктические прерии.
2 Guthrie, 1982, p. 308.
3 Томирдиаро, 1979, стр. 116-122.
4 現在発掘されるマンモスの化石、凍結死体などの年代測定では、Sartan 期より古い Karginskiy 期のものが多いとか、花粉分析によって Sartan 期の環境が大草原の存在を証明し難い、とする説など。
5 Кондратов, 1983, стр. 97-100, 邦訳 96-100 頁。
6 気候に関する以上の数値は、次の文献による。Сивцева и Мостахов, 1968, стр. 34-39, Сергеев, 1989, стр. 92-96, 畠山 1964, 143-180 頁。
7 Мурзаев, 1984, стр. 563.
8 Невяжский и Биджиев, 1960, стр. 90-95.
9 齋藤 1981。
10 齋藤 1979。
11 Тоймада. 筆者の 1991 年夏のフィールドノートでは、ヤクーツク永久凍土研究所スタッフからの聞き取りでこの語と綴り、および「広い谷」という意味を記録している。一方、1994 年の夏にヤクーツク市内で見かけた広告板には、Туимада と綴られていた。いずれの語形が正しいかは、今後確かめてみたい。
12 Андреев, 1989, стр. 102.
13 Левин и Потапов, 1959, стр. 269-270.
14 Jochelson, 1933.
15 齋藤 1988。
16 Попов, 1989, стр. 107-108 を参照。
17 Коротов, 1989, стр. 109-110 を参照。
18 Дмитриева, 1989, стр. 104 を参照。
19 ГОСКОМСТАТ СССР, 1989, стр. 189-214.
20 Гурвич, 1977.
21 Müller, 1882.

文 献

Андреев, В. Н., "Растительность," *Атлас Сельского Хозяйства Якутской АССР*, Главное Управление Геодезии и Картографии при Совете Министров СССР, Москва [以下では *Атлас* と略記], 1989, стр. 102.

ГОСКОМСТАТ СССР, *Итоги Всесоюзной Переписи Населения 1979 года*, том IV, Москва, 1989.

Гурвич, И. С., *Культура Северных Якутов-Оленеводов*, Наука, Москва, 1977.

Guthrie, R. D., "Mammals of the Mammoth Steppe as Paleoenviromental Indicators," in: David M. Hopkins et al. (eds.), *Paleoecology of Beringia*, Academic Press, New York & London, 1982, pp. 307-326.

Дмитриева, З. М., Население, *Атлас*, 1989, стр. 104.

Jochelson, W., *The Yakuts* (Anthrological Papers of the American Museum of Natural History, vol. XXXIII, part II), New York, 1933.

Кондратов, А. М., *Была Земля Арктика*, Магаданское книжное издательство, Магадан, 1983.

[邦訳　A・コンドラトフ著、齋藤晨二訳『北極大陸物語』地人書房　1991]

Коротов, Г. П., Жнвотноводство, 1989, *Атлас*, стр. 109-110.

Левин, М. Г. и Л. П. Потапов, *Народы Сибири*, Издательство Академии Наук СССР, Москва-Ленинград, 1956.

Müller, F. F., "Yakut," in: *HRAF* RV2 Yakut, Source No. 51.

Мурзаев, Э. М., *Словарь Народных Географических Терминов*, Мысль, Москва, 1984.

Невяжский, И. И. и Р. А. Биджиев, "Эоловые формы рельефа центральной Якутии," *Известия Академии Наук СССР*, серия географическая, 3, 1960, стр. 90-95.

Попов, Н. Т., "Растениеводство," *Атлас*, 1989 стр. 107-108.

齋藤晨二「アラースとその人為的影響 ── ヤクーチヤの旅から」『名古屋市立大学教養部紀要　人文社会研究』23、1979、67-79頁。

齋藤晨二「コリマ川下流域とエドマ層」『名古屋市立大学教養部紀要　人文社会研究』25、1981、129-145頁。

齋藤晨二「〝ヤクートと家畜〟の原像を求めて ── オロンホを読む ──」『国立民族学博物館研究報告』13巻2号、1989、375-382頁。

Сергеев, Г. М., "Климат," *Атлас*, 1989, стр. 92-96.

Сивцева, А. И. и С. М. Мостахов, *География Якутии*, Якутское книжное издательство, Якутск, 1968.

Томирдиаро, С. В., *Природные Процессы и Освоение Территорий Зоны Вечной Мерзлоты*, Недра, Москва, 1978.

Томирдиаро, С. В., "Формирование лёссово-ледниковых покровов на равнинах северо-востока Азии в холодные и сухие фазы верхнего плейстоцена," *Известия Академии Наук СССР*, серия географическая, 1, 1979, стр. 116-122

畠山久尚（監修）『アジアの気候』（『世界気候誌』1）古今書院、1964。